

スペイン黄金世紀演劇における「血の純潔」の 再検討に向けて

吉 田 彩 子

Hacia la reivindicación de la limpieza de sangre en el teatro áureo
español

Saiko YOSHIDA

La existencia de los estatutos de limpieza de sangre causaron graves conflictos en la sociedad moderna española y el concepto del honor de la época estaba ligado a la castidad racial-religiosa, lo cual es el hecho confirmado por los estudios históricos. Apesar de ello los investigadores de la literature tienden a explicar el honor del teatro áureo independiente del problema de limpieza de sangre. Examinamos la justificación de este enfoque, observando el problema del fondo, la crítica contra Américo Castro, y los estudios literarios realizadas en esta línea.

要 旨

血の純潔規約の存在が近世スペイン社会において大きな問題であり、名誉の概念が血の純潔性と結びついていたことは近年の歴史研究においても明らかである。それにもかかわらず現在の文学研究の主流は黄金世紀演劇の名誉を血の純潔と無関係なものとして扱っている。本稿では、問題の背景にあるアメリコ・カストロ史観への批判、ならびにその延長上に行われている作品解釈の考察を通じて、文学を歴史的社会的現象と切り離して論じるこのような研究動向の妥当性を問う。

はじめに

拙論「スペイン黄金世紀文学における名誉と血の純潔」(2019)において、名誉と血の純潔を結びつけたアメリコ・カストロの主張 (Castro, 1961)

が文芸批評と歴史学の二つの視点から批判されたこと、一方で、近年の歴史研究においては「血の純潔規約」の存在とその多様なあり方が明らかになっており、規約の存在を背景にした名誉と血の純潔の結びつきが文献的に裏づけられていることを示した。そのような社会的事実を前に、文学作品における名誉の概念が血の純潔と無関係であると考えすることはできないし、演劇研究における血の純潔の排除は作品解釈にも支障をきたすと結論づけたのであった。

しかしながら、上記のように結論しただけでは問題を解明したことにはならない。カストロの著作に端を発する批判（Jones, 1965）が半世紀を経てそのままり返され（Arellano, 2015）いっぽうで、文学研究が1990年代以降の歴史学の成果にもかかわらず、血の純潔について沈黙を続けている¹現状は、どのように説明されるのだろうか。

黄金世紀演劇と血の純潔の関わりを否定する二つの要素、アメリコ・カストロの歴史観への評価（批判）と、文学外の事象を排除する作品解釈を具体的に考察することにより、問題の所在についてつまびらかにしたい。

I アメリコ・カストロの主張とその評価

1. アメリコ・カストロによる名誉と血の純潔の関係

スペイン演劇における名誉の問題は言語・文学研究者としてのカストロの出発点における関心事であった。1916年の論文²の冒頭で彼は、これが「名誉という我が国のコメディアにおける複雑な問題について」の完成した研究成果ではなく、将来おこなわれるべき総括的な研究のための準備となる考察であると述べている（Castro, 1916: 1）。前半の締めくくりの形で示される問題提起は次のようなものである。

* 本稿は2019年度日本イスパニヤ学会第65回特別大会（拓殖大学八王子国際キャンパス）における口頭発表をもとに執筆した。

1 状況は我が国においても同様である。黄金世紀演劇に関する最新の出版物（佐竹謙一, 2019）は「名誉劇—名誉・嫉妬・復讐」と題する章に30頁余を割いているが、血の純潔については、それを名誉の概念に含めるか否かも含めて、全く言及していない。

2 “Algunas observaciones acerca del concepto del honor en los siglos XVI y XVII”

「演劇における名誉の概念は、中世に存在した、そして16・17世紀に他の国々にも見出されるところの、普遍的な信条の発展でしかないとすれば、何がスペイン特有なのか、なぜ誰もがこの点にスペイン文学の特徴があると認めるのだろうか。」(Castro, 1916: 48-49)

名誉に関するスペインの特異性とは、演劇のなかで評判 fama, opinión が筋書きの中心となっている点だが、その理由を「スペイン社会では評判 opinión が他の国々よりも大きな重要性を持っていた、スペインと他の国々との違いは、名誉の概念という質ではなく、その生活への影響という量にあるのではないか」と推論し、ここからコメディアにおける評判の重要性は17世紀スペインの社会状況から説明できるという仮説を導き出すのである。すなわち17世紀のスペイン社会は、宗教的にも政治的にも他のヨーロッパ諸国には見られない厳格な団結を保っており、個人は社会と完全に一体化することによって評判を維持することができた。「評判は社会の諸原理を肯定する証であり、人生と、その反映であるところの芸術における最も重要なものになったのである。」(Castro, 1916: 50)

この問題提起に対する回答は、それから45年後に『葛藤の時代について *De la edad conflictiva*』(1961)で示されることになる。彼の代表作である『歴史のなかのスペイン: キリスト教徒、ムーア人、ユダヤ人 *España en su historia. Cristianos, moros y judíos*』(1948)および、その増補改訂版にあたる『スペインの歴史的現実 *La realidad histórica de España*』(1954)における血の純潔問題への着目を通じて、名誉は血の純潔と結びついたのである。

カストロによれば「名誉劇の見えざる背景となっているのは血の純潔規約の活きたドラマ、そしてその是非をめぐる長きにわたる論争である」(Castro, 1972: 33)。特定の団体や職業から新しいキリスト教徒を排除するという血の純潔規約は社会的葛藤の原因となった。改宗者の血筋が混じっているか否かの判定はしばしば曖昧であった(単なる噂に基づくこともあった)。規約がキリストの教えにかなっているか否かをめぐっても長く激しい議論が続いていた。名誉は血の純潔と結びつくことによって貴族だけのものではなくなった。血の純潔規約の存在によって、全ての人々が「人の評判によって名誉が攻撃される機会を作らないように気を配り、そ

して演劇は、傷つけられた名誉の損壊と回復の事例を上演することで大盛況を誇ったのである。」(Castro, 1972: 58-59)

カストロは名誉のもうひとつの側面、中世から受け継いだところの「男らしさ」に焦点をあてる。武勲詩からロマンセロ、そしてコメディアへと受け継がれたカスティリヤの価値観とは、英雄的なもの＝男らしさの評価であった。名誉が血の純潔と結びつくことによって、男らしさは旧いキリスト教徒の証となる。自らの危険を顧みずに躊躇なく敵を殺す男らしさは、コメディアにおいては農民（旧いキリスト教徒）が強力な貴族に立ち向かう勇気となったのである（Castro, 1972: 29）。

名誉劇における夫の復讐は「スペインの伝統や当時の習慣の反映ではなく、風評 *opinión* の攻撃から身を守ろうとするもの、恐ろしい義務として、《*opinión*》という神への生け贄として、愛する妻を殺さざるを得ない人々の《男らしさ *hombria*》を強調しようとするものなのである」（Castro, 1972: 78）

『葛藤の時代について』で演劇の名誉について触れているのは序文と第1章の70頁余のみであり、その後は血の純潔と結びついた名誉観がスペイン社会でどのような役割を果たしたかという主として歴史的な視点が扱われる³。名誉劇における夫の復讐（性的な男らしさ）と血の純潔（汚点のない先祖伝来の信仰）の結びつきについては、二つが『ペリバニェス』において初めて一体化されたというのみで（Castro, 1972: 94）それ以上の説明はない。

2. アセンシオによるカストロ批判

文学における名誉を血の純潔と結びつけることに反対する根拠のひとつは、この問題にかかわるアメリコ・カストロ（とその追従者たち）の歴史認識に対する否定にあった。血の純潔が『歴史のなかのスペイン』および『スペインの歴史的現実』を通じて形成されたカストロの歴史観の中核にあることを考えれば、ケイメンの批判⁴（Kamen, 1996）はカストロの歴史観そのものへの批判であると考えられる。カストロの歴史観は当初より多

3 名誉に関わる二つの語彙、*honor* と *honra* の意味の違いについて記した箇所が一段落（Castro, 1972: 57-59）でしかなかったことと合わせて興味深い。

4 吉田, 2019: 31 頁。

くの批判にさらされてきたのであるが、それは何が、何ゆえに受け入れられないからなのであろうか。また一連のカストロの歴史観に対する批判のなかで血の純潔はどのように扱われているのだろうか。

エウヘニオ・アセンシオ Eugenio Asensio (1902-1996) の著作『アメリカ・カストロによる空想のスペイン *España imaginada por Américo Castro*』(1976) を例に考察する。

この書物はカストロの死の4年後に出版されており、生前のカストロ本人を巻き込んだ論争からは時間的な隔りがあるが、各章を構成する論文の初出はそれぞれ1966年、1967年、1972年であり、15頁にわたる序文のみが出版にあたり書きおろされている。またアセンシオが扱っているのは『歴史のなかのスペイン』および『スペインの歴史的現実』であり、それ以後の著作には殆ど言及していない。

1996年12月の論文「歴史家アメリカ・カストロ：『スペインの歴史的現実』についての見解 Américo Castro Historiador: Reflexiones sobre *La realidad histórica de España*」の論点は以下のように要約されよう。

- 1) 発想と歴史理論の非独創性：スペイン史の見方にも、歴史理論にもカストロにヒントを与えた先駆者が存在する。スペインではメネンデス・ペラヨ、ウナムノ、オルテガ、バリエ＝イン克蘭。国外ではディルタイ、シュペングラー、トインビーなど（マルクス主義およびそれと類縁関係にある経済理論は取り入れない）。
- 2) 歴史記述における史実と資料の選択における恣意性：使徒サンティアゴ、ゴンサロ・デ・ベルセオ、『良き愛の書』のケース。
- 3) ユダヤ人および改宗者（コンベルソ）がスペインの文化、財政、国の構造について大きな貢献をしたと言うカストロの主張は、すべて資料的裏づけを欠くものである。
- 4) カストロはスペインの精神と文化には他のヨーロッパ諸国と大きく異なるところがあると主張するが、この主張を3点にわたって反駁する。すなわち、カストロがスペイン独自と考える労働の軽視、宗教の内面性、芸術表現と人生の一体性は、すべて他のヨーロッパ諸国と共有するものであると。

二番目の論文「改宗者（コンベルソ）たちの文学的特徴 *La peculiaridad literaria de los conversos*」(1967) は上記3) の内容を整理して詳述した

ものであり、以下のように要約される。

- 1) 対象としている作家をコンベルソと確定するために必要不可欠な系譜学的な裏づけをカストロは行っていない。
- 2) コンベルソ的な作品と言うためには、何がユダヤ的かの客観的基準が必要である。コンベルソであることがその作品の特性にかかわっているかどうか、何がユダヤ的であるかを恣意的に決めることはできない。
- 3) コンベルソの家系であるテレサ・デ・ヘスス、ルイス・デ・レオンの作品にはなんらユダヤ的な特徴は認められない。
- 4) カストロがコンベルソと断定する作家たち、すなわちラサリーリヨの作者や、フアン・デ・メナは、実際には旧いキリスト教徒である。

三番目の論文「アメリコ・カストロの歴史研究についての覚書 :A.A. シクロフの論文を契機として Notas sobre la historiografía de Américo Castro. Con motivo de un artículo de A.A.Scroff」(1972) は10章に分けられおり、第9章までは前の二つの論文で述べたことの繰り返しである。第10章⁵の主旨はカストロの説に則って書かれたシクロフの血の純潔規約に関する見解に反論するもので、アセンシオの主張は次のように要約される。

- 1) 宗教的な目的から生まれた血の純潔規約は階層間の抗争の手段へと変化した。
- 2) 当初は不利益を不当に被っていた農民や貧しいイダルゴ階級を救済するものだったが、後に強者となった彼らが弱者となった新キリスト教徒を排除する道具となった。
- 3) 少数者による利益の独占を避けて多数の弱者に利益を配分するために不平等な規定を作る政策は現代でもしばしばおこなわれることだとアセンシオは言う。しかし、スペインでは新キリスト教徒の不利益、不公正な扱いは長く続いた。「弱者を救済した規約は、恵まれた人々の新たな砦、純潔という新たな神話に支えられた独占権となったのである。」(Asensio, 1976: 178)

以上が1966年から1972年までに発表されたカストロ批判の骨子であり、それは一言でいうならカストロの主張の資料的裏づけが脆弱であるという

5 初出論文は全9章。1976年版で「商売する貴族、労働するイダルゴ Nobles que comercian, hidalgos que ejercen oficios」と題する第8章が挿入され全10章の構成となった。

ことに尽きる。反論の論点としては歴史学の論争の正道といえるだろう。しかしながら、これらの論文を一冊の書物として出版するにあたり、アセンシオは序文の形でカストロ批判の総論とも言えるものを示した。それは学術論争というよりもイデオロギー論争としての性格を明らかにしている。Castroの手法を「恣意的」「党派的」と非難し、『スペインの歴史的現実』で試みた歴史の再構築は「歴史の捏造」であると断じた。アセンシオが非難するのは、具体的には次の3点である。

- 1) 個々の歴史的事実の「捏造」
- 2) レコンキスタとスペインの統一に対する否定的評価
- 3) ローマ以来の歴史の一貫性（西洋のなかのスペイン）の否定ないしは過小評価

脆弱な資料的裏づけから導かれる結論が事実から乖離することは想像に難くないが、それを単に方法上の誤りとするのではなく「歴史を捏造している（falsean la historia）」とまで言うのはカストロの資料選択が党派心から行われていると考えるからで、それはとりもなおさずアセンシオ自身が別の党派的思考に近いこと示唆する。レコンキスタとカトリック両王の功績についての評価、および言語と宗教に基づくヨーロッパ的スペインの肯定（イスラム的・ユダヤ的スペインの否定）は現代の保守思想（歴史修正主義 revisionismo）とも連動している。

そのなかで血の純潔規約に関するアセンシオの姿勢は、その後の歴史家⁶に比べればむしろ中立的であるといえよう。中世末期のコンベルソの安寧と農民の悲惨を詳述して、規約が制定された当初の正当性を強調する（この点でカストロの認識を誤りであるとする）が、その後の社会で規約が弱者となったコンベルソに対する抑圧となったことは認めている⁷。

Ⅱ 名誉と血の純潔を関連づけない作品分析

黄金世紀演劇を血の純潔問題から切り離して論じる根拠のもうひとつは、文学作品の解釈に文学外の要素を持ち込むべきではないという文芸批

6 例えばケイメン（Kamen, 1996）。

7 アセンシオに対する書評のなかで Sainz Rodríguez（1977）は血の純潔規約についての指摘を高く評価している。

評的な姿勢であった⁸。文学作品は作者の伝記や作品の歴史社会的な背景からきり離して論じるべきであるという作品の自律性の主張は20世紀の批評を牽引した文学理論である。19世紀の実証主義に対する反動として、それが唱えられた時点では必然性も説得力もあったと思われるのだが、文学作品を理解する多様な可能性を排除すると言う意味では偏狭な理論でもあった。このような反省からか、1980年代以降「新歴史主義」と言われる潮流が台頭している現在、文学作品の自律性の主張は相対化されたものだと考えられる。すなわち文学外の社会的問題である「血の純潔」を解釈から排除することは作品研究に課された至上命令でもなければ、そのような理論にしたがうことが無条件に正しいわけでもない。作品解釈にあたっでどの文学理論の採用が正しいかは、それがどれだけ問題を解明できるかにかかっている。そのような観点から、黄金世紀演劇と血の純潔を関連づけない解釈が名誉の主題をどのように解明するのか、イグナシオ・アレリャノ (Arellano, 2015) とマルク・ヴィッツ (Vitse, 2002) を例に考察したい。

1. アレリャノによる『サラメアの村長』と『名誉の医師』の解釈

アレリャノは「黄金世紀演劇における名誉(と権力)の倫理」(2015)においてアメリコ・カストロの名誉と血の純潔を関連づける考え方がカルデロン劇の正しい理解を妨げてきたとして、それとは異なる名誉の倫理を定義し、そのような名誉の機能は演劇のジャンルによって異なっていたと主張した。すなわち、演劇における名誉の主題は、深刻な社会問題の反映ではなく、悲劇では深刻に扱われたが喜劇では嘲笑の対象となる相対的な主題にすぎない。カストロとその追従者たちは、演劇の名誉を血の純潔と関連させることにより、喜劇における名誉の正当な理解を不可能にした。このような論旨に沿って、彼は二つのカルデロン劇、『サラメアの村長 *El alcalde de Zalamea*』⁹と『名誉の医師 *El médico de su honra*』の名誉を分析している。

それでは、アレリャノの定義する黄金世紀演劇の名誉とはどういうもの

8 Jones (1958, 1965).

9 *alcalde* は司法官を意味し「村長」という訳語は正しくないとの指摘(芝, 1993)から、近年では作品名を『サラメアの司法官』とする記述もあるが、わが国では森鷗外以来「村長」が当てられてきた伝統から、ここでは「村長」の訳語を使用する。

だろうか。彼によれば、名誉とは貴族の権威である。貴族の階層に属するメンバーは、共同体のためにこの権威（名声または尊敬）を確保しなければならない。貴族の権威が失われれば、社会組織は破壊され、階層間の差異が消滅し、ジラルルの言う暴力に支配された混沌が生まれるからである。名誉が傷つけられた場合（それは社会の秩序に対する攻撃であるが）回復は出来るだけ秘密裏に（不名誉の拡散を避けて）行われなければならない。名誉を毀損された者は復讐によって権威を取り戻す。すなわち、名誉はそれを犯した者に死を与えて守られる（Arellano, 2015:25-26）¹⁰。

以上のような名誉観に準拠してアレリャノは『サラメアの村長』の名誉は次のように説明されるという。村長クレスポは農民なので彼には名誉はない。彼が守ろうとしているのは人間の尊厳である。クレスポは自分の尊厳を守ろうとして「名誉」を守る貴族を模倣する。このときクレスポは「名誉」という言葉を使うが、それはほかに的確な言葉が見当たらないからである。娘イサベルを陵辱されたクレスポとその家族が失われた尊厳を回復するため取る行動は、いずれも、貴族に課された名誉の掟の模倣である。クレスポは貴族を模倣して隊長に娘との結婚を迫り、拒絶した隊長を殺す。兄ファンがイサベルを殺そうとするのも、罪のないイサベルが父親に殺される覚悟をするのも、陵辱された娘は陵辱者とともに殺されなければならないという名誉の掟を受け入れる（模倣する）からである（Arellano, 2015:26-27）。

このような解釈に対して幾つかの疑問を呈することができるだろう。第一に、クレスポは自分が古いキリスト教徒である（血が純潔である）ことを明言しており、そのような農民には貴族に劣らない名誉があることが認められていた¹¹。それでもクレスポに名誉はないという理由は何だろうか。またクレスポに名誉がないのであれば、貴族を模倣して「尊厳」を「名誉」と呼び、その掟を模倣して報復（殺人）を行う人物像に、多くは平民であった観客は共感できたのだろうか。さらに、イサベルの処遇をめぐっても疑問が残る。名誉を守るために、被害者である娘を殺害することがなぜ必要なのだろうか。クレスポがイサベルを殺さずに修道院に送るのは彼自身、

10 名誉が貴族に属すること、およびそれが失われた場合の回復法（名誉の掟）は、血の純潔に着目する以前のカストロと同様である（Castro, 1916 : 17-34）。

11 アグスティン・サルシオの著作に関連する書類の記述（吉田、2019 : 35）。

自分の名誉が模倣にすぎないことを知っており、名誉の掟を絶対視していないからだとアレリャノは説明するが、処女を失った（あるいはその可能性がある）娘が修道院に送られるのは農民（平民）に限ったことではなかった。

『名誉の医師』の解釈に移ろう。アレリャノによれば、この作品において犠牲者は殺される妻ではなく殺す側の夫である。貴族である夫は共同体（貴族社会）によって支持されている「名誉の掟」に従って行動する義務があり、この義務から逃れることはできない。妻を殺害するカルデロン劇の夫は貴族の規範が命じる社会的な義務を果たしているにすぎない。この義務（妻殺し）は、道徳的・宗教的見地からは非難されるが、劇の倫理 *ética dramática* としては完璧に有効である（Arellano, 2015:28）。

しかしながら、劇の倫理 *ética dramática* とは何か。誰が決めるのか。妻の不貞がなぜ貴族社会の組織を破壊するのか。そしてなぜ夫が、社会に対して妻を殺す義務を負うのか。仮に「名誉の掟」が違反者に対する復讐（殺害）を命じているとしても、不貞が疑われるにすぎない妻は違反者と言えるのか。それらの点について上記の解釈は説明していない。

2. ヴィッツによる『名誉の医師』の解釈

マルク・ヴィッツによる「グティエレ・アルフォンソ・デ・ソリス」（2002）は、これまでの批評のなかで無慈悲な殺人者として否定的に扱われてきた『名誉の医師』の主人公を、貴族的な英雄精神の体现者、新たな時代に合わせた悲劇的英雄像として肯定的に評価しようとするものである。

そのような解釈の前提としてヴィッツは作品の自律性を主張する。文学作品を支配する倫理的規範というものが自律的に（独立して）存在していて、これは作品の外部にある価値基準とは無関係なものである。登場人物の行動を作品の倫理的規範にしたがって判断するためには、作品の外にある価値のシステムを捨てる、あるいは停止させる必要があると言うのである（Vitse, 2002: 161）。

作品外部の価値基準に従う判断とは、これまで『名誉の医師』の解釈をめぐって論じられてきたことに他ならないとして、ヴィッツは二つの例を挙げる。ひとつは夫婦間の名誉についての社会的な基準（不貞行為の有無）に従って主人公の妻メンシーアは無実であると考えること、もうひとつは

妻を殺害するというグティエレの行動が、愛と許しを説くキリスト教道徳に合っているかどうかを論じることである。「社会的規範であれ宗教的規範であれ、作者によって練り上げられ、すべての登場人物に割り当てられる、作品の内的規範よりも重視されるべきではない」(Vitse, 2002: 162)。

『名誉の医師』を支配する内的な価値観とは、英雄的であること、自己および他者を絶対的に制御しうる理想的な人間となることである。「登場人物は其々の理想に従い英雄的であろうとするが、ドン・グティエレだけがカルデロンの理想とする厳格な倫理的要求に従うことができた。ドニャ・メンシーアが名誉の、カスティリヤ王ドン・ペドロが厳正さの偽英雄であるのに対し、ドン・グティエレだけが真の英雄なのである」(Vitse, 2002: 164)として、作品を8つのパートに分けて分析することによりそれを示した。

分析結果は以下のとおりである。国王は冷徹に正義の裁定を行う君主でありたいと願っているが、実際は情に流されている。正義を行うのではなく、人々の喝采を得たいと思う俳優のように振舞っているだけの人物だ。ドニャ・メンシーアは女性として鋼のような貞潔の美德を持つ人物でありたいと願っているが、実際は情と欲望に流され、身の程をわきまえずに危険にさらされる。死による懲罰は彼女自身の浅はかさに対する当然の報いである。ドン・グティエレだけが自分を律して、愛情に流されることなく名誉の掟に従って妻を殺害し、英雄的であることを実現する。つまり、彼はこのようにしてカルデロンの考える英雄主義の体現者となるのである。

台詞のひとつひとつを（行間も含めて）丹念に読み解き、残酷な殺人者と思われる人物を悲劇の英雄、正義の裁きを行う名君と殺人の被害者である女性を卑劣な偽英雄として描き出す逆転の発想は斬新で、読者はヴィッツの雄弁にとりあえず説得された気分になるのだが、時間とともに疑問が生じる。解釈はすべて台詞の読み解きを根拠としているが「読み解き」の客観性はどうか担保されるのか。ヴィッツが読み解く登場人物の複雑な心理とメッセージは、当時の観客が受け止めたものなのだろうか。登場人物の「偽英雄」としての性格（たとえばメンシーアは軽薄な男好き *ventanera* である）は客観的なものか。そしてなによりも、作品内部の価値観（この場合「英雄的であること」）の根拠は作品のどこに示されているのか。つまり、このような斬新な解釈は現代人の視点からのもので、時代のなかの

作品とは別のものなのではないか。

アレリャノおよびヴィッツの解釈は、名誉を主題とするスペインの演劇作品について論議の対象となってきた根本的な疑問に答えていない。なぜ名誉の回復のために罪のない女性の殺害が必要なのかという疑問である。不貞が実行されていないことを確信しつつ妻を殺す『名誉の医師』は、嫉妬のあまり事実を誤認して妻を殺す『オセロー』とは異なる。後者は自分の過ちを悔いた夫の死で終わるのに対し、前者は国王が殺害者の夫を賞賛して終わる。この違いがなにかということは、とくに外国のスペイン文学研究者を長年悩ませた問題であった。それはまた、カストロが名誉の問題を扱うに際して行った問題提起、名誉の概念は16・17世紀の他のヨーロッパ諸国と共通であるのに、名誉を扱う演劇がスペイン独自のものと言われることになった理由と関わる。すなわち、カストロが後年その答えとして手にした、血の純潔規約の存在であった。

Ⅲ 名誉劇と血の純潔はどのように結びつくか

1. 舞台上の「血の純潔」：マッケンドリックの問題提起

メルビーナ・マッケンドリック Melveena Mckendrick は「スペインのコメディアにおける名誉と復讐：模範的転移のケースか」(1984)において、名誉劇の名誉が「血の純潔」問題と結びつくというカストロの見解を支持する一方で、『葛藤の時代について』においては「血の純潔」と男らしさがなぜ結びつくか十分に説明されていないと指摘した。マッケンドリックが試みたのは精神分析の概念を導入した説明である。すなわち、現実社会における社会的名誉（血の純潔）が劇中で性的名誉（妻・娘の貞潔＝男性性に関わる名誉）として扱われるために、名誉についての強迫観念の転移が起っている。その結果、血筋（一族の過去）という舞台上に存在しない事柄が、男女の葛藤という舞台上で進行する事柄になり、血筋（貴族性）という一部の階層にしか関わらない問題が妻や娘という万人に関わる問題となって、黄金世紀演劇が大衆をとらえる演劇として成功した(Mckendrick, 1984: 335)。

しかしながら「血の純潔」は社会的名誉であるだけでなく、性的名誉

とも密接に関わっている。コンベルソの血は女性を介して一族の中に混入するのであり、それゆえに一族の女性の行動に対する管理・監視が行われた。旧いキリスト教徒にとっては、現在の名誉（血の純潔）が守り続けられるかどうかはいつも不確定である。すなわち、血の純潔はマッケンドリックの言うように舞台上で扱うことのできない過去の物語ではなく、男女の葛藤のなかに進行中の、現在の問題である。『葛藤の時代について』のなかで演劇についての具体的な記述が少ないことが理解の混乱を生んでいることは確かであるが、性的名誉を守るための男らしさが血の純潔の証であるとカストロは繰り返し述べてもいた。さらにまた、血の純潔は農民の名誉として、舞台上に存在している。黄金世紀の名誉劇の成功を生んだのは、「血筋」が貴族だけのものではなく平民の名誉となったことに拠っていたのである。

2. 血の純潔から試みる名誉劇の分類

名誉劇を血の純潔と結びつけるべきか否かについて、前章では結びつけないとする解釈をとりあげた。本章では、結びつかざるを得ないのだが、どのように結びつくのかがはっきりしないという理解があることをとりあげた。これはカストロの記述が少ないことにも起因しているが、もうひとつの混乱の原因は名誉劇と言う名称で異なる性質の作品がひとまとめにされているからでもある。以下、血の純潔との関係から名誉劇と呼ばれるものの分類を試みる。

(1) 農民の名誉を主題とする作品

農民と貴族の対立を扱う作品群であり、旧いキリスト教徒である農民がその名誉を蹂躪しようとする貴族と闘って名誉を守ることを主題とする。名誉が血の純潔と結びついて現れるもっとも明白なケースであるが、ここでも貴族による名誉の蹂躪は農民の性的名誉（一族の女性の貞操）に対する攻撃として現れる。農民同士のカップルの女性に貴族が横恋慕し、時に誘拐することもあるが、多くの場合国王が介在して貴族を処罰し、被害者の女性は本来の相手と結ばれる。例としてはローペ・デ・ベガによる三作品、『フエンテオベフーナ *Fuenteovejuna*』『ペリバニェスとオカニャの騎士団長 *Peribáñez y el comendador de Ocaña*』『国王は最良の司法官 *El mejor alcalde el rey*』が挙げられる。

前章で扱ったカルデロン『サラメアの村長』では、単に農民の名誉が蹂躪されるというだけでなく、失われた名誉の回復が「名誉の掟」に従って実行される。暴力による性関係であっても結婚を受け入れれば相手を許すが、一方で陵辱された娘を事態の解明をまたずに殺そうとする発想は、正規の婚姻以外の男女関係から素性の明らかな血筋の混入を恐れる、血の純潔規約と結びついた名誉観抜きには理解できない¹²。なお、農民の名誉を扱う作品はカルデロンではこの一作のみである。

(2) 夫婦間の名誉を扱う作品

すでに扱った『名誉の医師』がそれに属する。この作品の特色は、夫婦間の名誉が王族と臣下のあいだで争われる(妻の不貞の相手が王弟である)こと、そして不貞行為の有無が確定できない(ほぼ行為はなかったと思われる)ことである。夫の名誉が妻の不貞によって傷つけられた場合、夫の名誉は妻と相手の男性の両方を殺すことによって回復されるというのが名誉の掟であるが、この場合、相手の男性は王族であるので手が出せない。夫の医師は名誉を守るために、秘密裏に妻だけを殺す。

これに類する作品として次の二作品が挙げられるだろう。いずれもカルデロンによる『秘密の恥辱には秘密の復讐 *A secreto agravio, secreta venganza*』『不名誉の画家 *El pintor de su deshonor*』である。前者では、夫は相手の男を海難事故に妻を火事に見せかけて殺す。不貞はまだ実行されていない。後者では、夫は妻を誘拐、幽閉した男と妻をピストルで殺す。妻は完全に無責で、不貞も実行されていない。

不貞行為の有無にかかわらず、疑わしい状況があれば夫は妻(とその相手)を殺害して良いという判断は、何を根拠に行われるのだろうか。当然ながら17世紀のスペインにおいても法律的には許されない行為であった。血の純潔規約を背景とする、非正規な性関係における血筋の混入への恐怖が、このようなストーリーを可能にしたとしか考えられない。夫婦間の名誉を扱う作品の多くが血の純潔と関わるのはそのような事情からである。

(3) 夫婦間の名誉を扱う血の純潔と関わらない復讐劇

一方で、夫婦間の名誉を扱いながら血の純潔とは関わらない作品も存在する。実行された不貞行為への夫の報復としての殺人を扱う演劇である。

12 Yoshida (2002). 吉田 (2003). Yoshida (2019).

ローペ・デ・ベガによる二作品『コルドバの騎士団長たち *Los comendadores de Córdoba* (1596-1598)』『復讐なき罰 *El castigo sin venganza* (1631,1634?)』がその例として挙げられる。前者は15世紀コルドバで騎士団長兄弟の一人に妻を寝取られた市議会議員が関係者を皆殺しにした実話に基づいている。後者もイタリアで実際に起きたとされるフェラーラ公爵の年若い妻と息子の恋愛を題材とする。公爵は策略を用いて息子に妻を殺させ、殺人罪で息子も処刑する。

いずれも妻の不貞に対する復讐としての殺人である。不貞行為は実行されているので妻は有責であり、この場合は血の純潔規約との関連が殺人の動機を説明するものではない。

名誉劇に分類される作品で扱われる名誉には、上記の作品のように血の純潔とは結びつかないものも含まれている。農民の名誉は、実は旧いキリスト教徒の名誉であり、血の純潔そのものであるが、人間の尊厳と混同されやすい。(3)の復讐劇は妻の不貞を題材としていることから(2)の名誉劇と混同されやすく¹³、その結果として名誉劇そのものを血の純潔と切り離すことにもなりかねない。名誉をめぐる混乱の一因と考えざるをえないのである。

3. 「名誉劇」の隆盛と血の純潔規約の関係

黄金世紀演劇で名誉の主題が好まれた背景には「血の純潔」規約の存在があったことはカストロが指摘するとおりである。規約により、名誉は旧いキリスト教徒に備わるものとなり、名誉ある階層が貴族から平民へと拡大した。結果として、名誉への関心とそれを失うことへの恐怖が社会全体で共有されることになった。「血の純潔」規約の社会的影響については時代、地域により差があったことは事実である。しかし規約は存在しており、それをめぐる社会の空気が名誉劇の流行を生んだのであることは否めない。

しかしながら、規約の存在が演劇にどのように反映したかは、二通りに

13 名誉を研究する論文でしばしば『コルドバの騎士団長たち』が引用されることも混乱に拍車をかけていると考えられる (Castro, 1916: 20-21、Laitenberger, 1998: 18)。

分けて考える必要がある。ひとつは社会全体の名誉への関心から名誉を扱う作品全般が歓迎される現象、もうひとつは血の純潔規約と結びついた名誉を守ることがテーマとなるスペイン独自の作品群の誕生である。

前者を説明するものが、演劇の題材は「名誉の問題が最良、すべての人々を強く感動させるから¹⁴」というローベの言葉であろう。これは名誉にかかわる事柄ならなんでも観客を集められた17世紀初頭の演劇状況を伝えていると思われる。彼の劇作家人生の始まりと終わりにあたる上記の二作品は、どちらも夫婦間の名誉を扱うが、一般的な不義密通とそれに対する報復である。報復の極端さと残酷性は「名誉の問題」についてのスペイン社会の異常な関心を窺わせはするが、報復行為そのものにスペイン独自の状況を導入しなければ説明不能な要素があるわけではない。混乱をさけるためには、これらの作品の具体的な解釈においては血の純潔問題に言及しない方がよいことになる。

血の純潔規約の存在により生み出されたスペイン独自の作品とは、農民の名誉を扱った作品群と、「血の純潔」問題を前提とした「名誉の掟」による殺人（無実無責の女性の殺害）が肯定される作品群である。前者としてローベによる三作品、後者としてカルデロンによる三作品があることは前節で述べた。これらの作品は、これを生み出した社会の特殊性から切り離されれば作品の構造それ自体の理解に支障が生じる。農民の名誉を普遍的な人間の尊厳とおきかえれば時代錯誤の解釈となろう。姦通が疑いの域を出ない無実無責の女性の殺害は、血の純潔規約の存在を考慮しなければ理解不能とならざるをえないのである。それを克服しようとして生じた解釈上の混乱は研究史に見るとおりである。

おわりに

スペイン黄金世紀演劇の名誉と血の純潔問題が結びつくことは明らかであるのに、近年の文学研究ではなぜそれが無視され続けているのかが当初の疑問であった。アメリカ・カストロの史観への批判と文学の自律性を主張する文学理論の存在は、その根拠としてすでに挙げたものだが（吉田、

14 “Los casos de la honra son mejores / porque mueven con fuerza a toda gente.” (Lope de Vega, *Arte nuevo de hacer comedias en este tiempo*, vv.328-329)

2019), 本稿では, その各々について, より詳細な考察を試みた。歴史観についてのアセンシオの検討からは, カストロの著作についての批判がその史観の根本, ローマ帝国の末裔というスペイン人の矜持を否定したことにあったことが窺われる。血の純潔規約の重要性を認めているとはいえ, カストロとそれに連なる研究者に対する断定的な否定は, フランコ体制を経たスペインの思想的風土を代表する見解のひとつであったと考えられ, それはまた文学研究にもなんらかの影響を与えたことが推測される。文学の自律性による作品解釈の検討においては, 解釈の客観性についての疑問が払拭できなかった。またこの方法では文学史におけるスペインの特殊性についても回答できないことは明らかである。

一方で『葛藤の時代について』におけるカストロの言説と, それに準拠して名誉劇を解釈しようとする試みを通じて, 名誉と血の純潔をめぐる幾つかの混乱があることも判明した。それを解決するための提案が, 名誉劇の分類と, 血の純潔規約の演劇への影響の捉え方である。

作業を通じて感じたことは, 名誉劇と血の純潔の問題に関して, ローペ・デ・ベガとカルデロンのスタンスの違いであった。これは時代的なものなのか, 二人の作家の感性の違いなのか, それを明らかにするためには, それぞれの同時代作家たちの作品と血の純潔規約の歴史的な実態についての広汎な調査が必要であろう。今後の研究課題として解明を待ちたい。

参考文献一覧

- ARELLANO, Ignacio (2015). "Éticas del honor (y del poder) en el teatro del Siglo de Oro", *BRAE* tomo XCV, cuaderno CCCXI, pp.19-35.
- ASENSIO, Eugenio (1966). "Américo Castro Historiador: Reflexiones sobre *La realidad histórica de España*", *MLN*, Vol. 81, No. 5, General Issue, pp. 595-637.
- (1967). "La peculiaridad literaria de los conversos", *Anuario de Estudios Medievales*, vol.4, pp.327-354.
- (1972-1973). "Notas sobre la historiografía de Américo Castro", *Anuario de Estudios Medievales*, vol. 8, pp.349-394.
- (1976). *La España imaginada de Américo Castro*, Ediciones "El ALBIR" S.A., Barcelona.
- CASTRO, Américo (1916). "Algunas observaciones acerca del concepto del honor en

- los siglos XVI y XVII” , *Revista de filología española*, III, pp.1-50, 357-386.
- (1948). *España en su historia. Cristianos, moros y judíos*, Buenos Aires.
- (1954). *La realidad histórica de España*, México.
- (1961, 1972) *De la edad conflictiva. El drama de la honra en España y su literatura*, Madrid, Taurus (本稿では1972年版を使用した。邦訳は『葛藤の時代について：スペイン及びスペイン文学における体面のドラマ』本田誠二訳 法政大学出版局, 2009年)。
- JONES, C.A. (1958) “Honor in Spanish Golden-Age Drama: Its Relation to Real Life and to Morals” , *Bulletin of Hispanic Studies*, Vol. 35, pp.199-210.
- (1965). “Spanish Honour as Historial Phenomenon, Convention and Artistic Motive” , *Hispanic Review*, Vol. 33, No. 1, 1965, pp.32-39.
- KAMEN, H (1996) “Limpieza and the Ghost of Américo Castro: Racism as a Tool of Literary Analysis” , *Hispanic Review*, Vol. 64, No. 1, pp.19-29.
- SAINZ RODRIGUEZ, Pedro (1977). Crítica: *La España imaginada por Américo Castro*, EL Pais, 6 FEB 1977.
- VEGA, Lope de(1609). *Arte nuevo de hacer comedias en este tiempo*, en Juan Manuel Rozas, *Significado y doctrina del “Arte nuevo” de Lope de Vega*, S.G.E.L., 1976, pp.181-194.
- LAITENBERGER, Hugo (1998). “Honra y venganza en el teatro de Calderón de la Barca” , *Calderón : testo letterario e testo spettacolo*. Atti del 1° Seminario Internazionale sui Secoli d’ Oro (Firenze, 8-12 settembre 1997), Firenze, Alinea Editrice, pp.9-82.
- MCKENDRIK, Melveena (1984). “Honour / Vengance in the Spanish ‘Comedia’ : A Case of Mimetic Transference? , *The Modern Language Review*, Vol.79, No.2 , pp.313-335
- VITSE, Marc (2002). “Gutierre Alfonso de Solís” , *Calderón 2000: homenaje a Kurt Reichenberger en su 80 cumpleaños: Actas del Congreso Internacional, IV Centenario de Calderón*, ed. Ignacio Arellano Ayuso, Kassel, Reichenberger, vol. I, pp.163-186
- YOSHIDA, Saiko (2002). “Una traducción temprana de *El alcalde de Zalamea* al japonés: Mori Ogai, 1889. En torno al problema de la aceptación”, en *Calderón 2000, Homenaje a Kurt Reichenberger en su 80 cumpleaños*, Ignacio Arellano (ed.),

Kassel: Edition Reichenberger, vol. II, pp.425-432.

————— (2019). “¿En qué consiste el honor áureo? El caso de *El alcalde de Zalamea* (traducción japonesa)” , *Cartografía teatral. En homenaje al profesor José Romera Castillo*, Visor Libros, pp.235-252.

佐竹謙一 (2019) 『カルデロンの劇芸術 聖と俗の諸相』 国書刊行会

芝修身 (1993) 「“alcalde” は村長か」, 『イスパニカ』 37, 44-53 頁.

吉田彩子 (2003) 「森鷗外のカルデロン翻訳 (一八八九年) をめぐって」『清泉女子大学紀要』 第 51 号, 35-47 頁.

————— (2019) 「スペイン黄金世紀文学における名誉と血の純潔」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』 第 27 巻, 25-40 頁.

